

明るい子 かしい子 たくましい子

元気がある 夢がある 楽しい学校 中央小



中央小だより

令和4年度 6月号

蕨市中央6-8-25

TEL 442-2672

児童数	(名)
男 子	204
女 子	173
計	377

子供の自立を見届ける～子供はみんな、うちの人大好き～

校長 原田 卓治

朝、校門に立っていると、親御さんに見守られながら登校してくる児童に出会います。親御さんにぐっと抱きついたり、手を振って別れたりなど様々ですが、その後元気に校舎に入っていきます。児童にとって、学校に行くということは、親御さんから離れて自立する大きな局面なのだとつくづく感じます。

そういった場面に出会うと、私の子育ての失敗談を思い出します。

私には娘が2人おり、そのうちの24歳になる娘は、「広汎性発達障害」という障害をもって生まれました。娘は、人と関わることが苦手で、未だに言葉を満足に操ることができません。

娘がまだ保育園に通っていた時、小学校就学前の個別・集団訓練を都内のある施設で受けさせていた時のある日の訓練場面でのことです。

その日は、保育園の担任の先生も見学に来てくださっていました。その時間は個別訓練の時間で、娘は担当の先生の指示で違う長さの棒を短い順に差していくこと(いわゆる、「ペグ差し」)をしていました。その訓練の途中です。娘は後ろで見学している私の所にやって来て、私の胸をギュッと抱きしめてきました。『何だろう?』私はそのしぐさの意味もわからず、イライラしながら見守っていました。何しろ、一筋縄ではいきません。長く通っていましたが、私の目からは訓練による進歩は見られず、その場を離れたり、大声を出したり、一度たりとも、課題をやり通したことがなかったのです。

『何でやれないんだ。』という苛立ちが私の胸にこみ上げてきました。『また、途中で投げ出してきて。ちゃんとやりなさい。』口には出さなかったものの、私の表情・態度はあからさまでした。その後娘は、机に戻りペグ差しを続けますが、しばらくすると、また私の胸を抱きしめます。その訓練中、合計3度その動作があり、私のイライラは頂点に達したのです。

その時、保育園の先生が私に話してくださいました。「よくがんばりましたね。お父さんの所へ行って、気持ち切り替えて、挑戦したんですね。』『えっ。そうなの。』自分の狭い視野でしか、そして娘の立場に立って物事を考えられなかった私には衝撃の言葉でした。

娘にとってその訓練は苦痛でしかなかったでしょう。やる意味もわからない、つらい時間。初めてのことに戸惑ったり、うまくいくためにどうすればいいのかアドバイスをもらったりする術もない。しかし、月に何度かあるその訓練を、私に無理やり連れてこられた娘は、必死になって耐え、娘のそんな思いなど知る由もないこんな私をすがって、抱きついてまでその訓練をやり通してきたのです。

その娘の健気さと、私の浅はかさを突きつけられ、私は目から流れ出るものを止めることができませんでした。そして、娘を抱きしめながら、『気づいてやれなくて、ごめんね。』と何度も何度も謝ったのです。

子供にとって、自立していく道のりは決して楽なものではありません。他の子と比べ、焦ることもあろうかと思います。そのような中でも大切なのは、子供が信頼し、頼れる大人がいることだと思います。ご家庭はご家庭で、地域は地域で、学校は学校でそのような大人でいることが重要なのではないのでしょうか。